

《海上花列传》の“几首”について

原瀬 隆司

A Study of the Meaning of “Jishou(几首)” in Haishang Hua Liezhuan

HARASE Takashi

Abstract

This paper presents a discussion on ‘jishou’ (几首) in Haishang Hua Liezhuan. In the modern Suzhou dialect, the word which stands for ‘over there’ is not in use. According to my analysis of Dangdai Wu Yu Yanjiu (当代吴语研究), ‘jishou’ is an old traditional word which still remains in a few districts of the Wu Dialect Area.

0 はじめに

清末吳語小説《海上花列传》（簡体字本、以下《海》と略称）には、“几首”^(注1)という語がみられる。人民文学出版本の注釈によると、「こちら」に対する「あちら」に意とされる。

《海》には、次の二例がみられる。例：

①朴齋道：“陆里搭嘎？”小村道：“耐要去，我同耐去未哉。比仔长三书寓，不过场花小点，人是也差勿多。”朴齋道：“价未去哩。”小村立住脚一看，恰走到景星银楼门前，便说“耐要去未打几首走。”当下领朴齋转身，重又向南，过打狗桥，至……（2回10頁）

朴齋が「どこか？」と尋ねる。小村：「お前が行きたければ、いっしょに行

こう。長三寓と比べたら、場所が狭いだけで、女はたいしてかわらない。」朴齋：「じゃ、行こう。」小村が立ち止まって見ると、ちょうど景星銀楼の前だったので、「行くなら、あちらからだ。」といて、すぐさま朴齋を連れて、もと来た南の方に向かい、打狗橋を渡り、…

②齐韵叟既见孙素兰，就道：“昨夜头俚噪才勿来浪，我倒勿曾想着；难教冠香来陪陪耐，再一夜天末铁眉来哉。”素兰慌道：“倪勳呀，梨花院落蛮蛮适意。今朝夜头说好来浪，原到几首去。”韵叟道：“价末让冠香一淘到梨花院落来，…（52回443頁）

齐韻叟は孫素蘭を見ると、「昨日の晩は彼らが皆帰ってしまうとは思いませんでした。今日からは、冠香にお相手をさせます。もう一晩したら、鉄眉がまいります。」素蘭はそれを聞くと、慌てて、「結構ですわ、梨花院は本当に居心地がいいんです。ですから、今夜はあちらに行くことに決めてありますから。」韻叟は、「では、冠香を梨花院へご一緒させましょう、…

“几首”という場所名詞は、“几”が指示部分で、“首”がその接尾辞と考えられる。

“首”は普通語では、派生義として、“上首”“下首”くらいにしか用いられないが、昆明のように、今日でも方位詞の接尾辞として、広く用いられている地域もある。^(注2)

《海》は、蘇州方言を中心として、それに周辺の小方言を交えた呉語文学作品とされているが、いま現代蘇州語の指示代詞をみると、この“几”なる語は、そのいずれにも属さないものであることがわかる。^(注4)

小稿では、“几首”という場所名詞が如何なる語なのか、又呉語語彙の変遷の中で、どのような位置を占めるのかを考えてみたい。

1 “该首”と“该搭”

《海》では、場所名詞としては、“几首”のほかに、“该首”と“该搭”が用いられる。

“该搭”（ここ）の例：

③倪从小到个该搭，生来才要依个大人，依仔哉晚，故末真间架。(52回442頁)

私たちは幼い時からここに連れてこられたわけですから、ここでご主人様に頼って生きていくしかないのです。こんなにして人に頼って生きていくのですが、それも又本当にいろいろ面倒なものです。

④素兰迎见，即道：“我要商量句闲话，耐两家头困来里勦转去，阿好？”琪官骇异问故，素兰道：“耐想该搭大观楼，前头后底几花房子，就剩我搭个大姐来里，阴气煞个，怕得来，困也生来困勿着。(52回438頁)

素蘭は出迎えると、すぐさま、「ちょっとお願いがあります。あなた方、今日は帰らないでここに泊まってくれませんか。」琪官は驚いて、その訳を尋ねます。素蘭は「ここ大観楼は、前にも後ろにも沢山の部屋があるでしょ。ここに私と大姐だけが残ったら、陰気くさくてしょうがありませんし、恐くて眠るに眠れませんから。

⑤淑人着急，立起身来阻挡道：“倪阿是到馆子浪去吃，叫个局罢？”子富嚷道：“馆子浪倪勦吃，该搭好。”(32回265頁)

淑人はいらいらしながら立ち上がり、制止して、「料理屋に行って、そこでやりましょう。」子富はそれを聞くと大声で、「料理屋ではやりたくない、ここでするよ。」と、言った。

次に“该首”（あちら）の例：

⑥藹人大喜，乃说道：“价末我到该首去哉，此地奉托三位。(18回148頁)

藹人は大いに喜び、そこでこう言った。「それでは私はあちらに行きますから、ここは、御三方にお願いします。」

⑦倪索性到蜿蜒岭浪去，坐来噪天心亭里，一个花园通通才看见。该首赏月末最好哉。(52回437頁)

いっそのこと蜿蜒嶺の頂上に行きましょう。あの天心亭からだったら、庭全体が見渡せます。あそこでお月見をするのがいちばんだわ。

⑧淑人始低声道：“勦响哩。耐要看好物事末，该首去。”(46回388頁)

淑人はそこではじめて小声で言った。「声をたてないで。いいものが見たいければ、向こうに行きなさい。」

上掲の例文③～⑤に用いる“该搭”は近称の場所名詞で、今日でも通行している。一方、⑥～⑧に用いる“该首”は、遠称で、この語は通行していない。先に掲げた「方言簡釈」では、この“该首”を近称と解し、“几首”と対義をなすように注釈しているが、疑問の残るところである。現代蘇州語では、場所を表わす指示代詞は、“该搭”（ここ）と“归搭”（あちら）が対義をなしている。今、仮に“该搭，该首”の“该”を特指、中指とされる ga?（尙，葛）の当て字と考えてみても、“该”を入声音に当てることは無理があると思われる。この“该”が近称と遠称のいづれにも用いられることは、如何に考えたらいいか。

《当代吴语研究》の「吴语的词汇系统」章には、“这儿，那儿，这边，那边”に相当する各地の語彙が記されている。それらを見ると、呉語には、場所を表わす指示代詞に、二種類の構語法のあることがわかる。^(注5)蘇州語などの構語法とは異なり、指示部分は共通し、接尾辞部分の相違によって、遠・近称の区別を立てる構語法を想定すれば、上に掲げた“该首”と“该搭”の対義関係は一応説明がつくと考えられる。

2 “几首”

《海》の人民文学出版本では、小稿の冒頭に掲げた①と②の2箇所“几首”がみられる。今回、《海上奇書》本については、第十期までの20回本しか現に眼にすることは出来なかったため、①の箇所しか確認できないが、やはり“幾首”に作る。人民文学出版本の「整理后記」に依れば、「全书初印本」を底本としたと記すから、それは光緒甲午石印初刊本（64回、1894年成書）に依った、と考えることができる。ところが、民国15年（1926年）に成った上海亜東図書館排印本（以下、亜東本と略）では、①の“几首”の箇所は“歸面”に、また②は“该首”に書き換えがなされている。^(注6)《海上奇書》から亜東本までは、時間的に三十数年しか経っていないにも関わらず、上記のような書換えがなされたことには、次の二点がその理由として考えられる。

(1) “几首”なる語が、古い呉語或いは呉語地区の一小方言を反映したものであり、当時にとっては、読者にとって、理解しづらい語であった為に、書換

えがなされた。

(2) 《海》の人民文学出版本では、指示代詞の“歸”は用いられてはいない。この点は、《海》以降の、《九尾龟》などの呉語文学作品とは大いに異なるところである。上述のように、例文①の“几首”の箇所が、垂東本では“歸面”に改められた背景には、蘇州語の“该”と“歸”という、対義をなす指示代詞が強く意識されていたのではないか。また、例文②の箇所が、“该首”に書換えがなされていることは、上に掲げたいくつかの例文と同様、この箇所が近称ではなく、遠称と解されているもの、と考えていいように思われる。このことは、《海》に於ける、場所を表わす指示代詞の語彙の中で、“该首”と“该搭”がやはり遠近称の一組の対義として整合性をもつものと解されていた、と考えることができる。

再び、《当代吴语研究》中の“这儿，那儿，这边，那边”について、各小方言の分布を見ると、“几首”[tcisv]に類した語が幾つか見られる。その一つ、呉江・盛澤を例にとると、此の地では、“那边，那儿”にあたる遠称の場所名詞を、[tcij3miI52]（寄面）という音で表わす。更に興味を引くことは、江阴のように、近称の場所名詞に[tcij52dEi]（己头）の音を残すことである。また、盛澤には、見母の口蓋化した[tcij3]（上掲）のほか、見母である[kI55miI31]（该面）^(注8)があり、共に“那边，那儿”を表わす語に当てられている。^(注9)また、宁波などでは、“这边，这儿，那边，那儿”を表わす語のいづれにも[kI?]の音が用いられる。北方漢語では、17世紀から19世紀はじめにかけて、見母などの口蓋化が起きたとされるが、呉語の中には、同一義を表す語として、[kI]と[tcij]の並存する小方言が尚、現存しているのである。また、[kI]が遠近称のいづれにも用いられる指示代詞が現存していることは、呉語の指示代詞を考える上で、興味ある言語現象である。

“几首”の“几”を用いた場所名詞は、^(注10)《綴白裘》にも見られる。例：

⑨幾里是哉。公明兄阿拉屋裡。

(3-2 水)

此の家がそうだ。公明兄はおられるか。

⑩盖个張相公我方終那對你說个，到伴来幾里吃酒。

(3-2 水)

張相公、私は先ほどあなたに言いましたでしょ、それなのにこんなところで皆と酒を飲んでいるなんて。

⑪拉虱自家屋裡，無葷弗吃飯，到子幾裡無飯弗吃葷虱噠，弗要慌，…

(3-1 荆)

うちでは肉がなければ食事をしなかったけれど、ここに来たら、食事に肉の出ない日は無いから、心配する事は無い…

“幾里”が近称の場所名詞として用いられる同様の例が《鉢中蓮》にも見られる。^(注11)

⑬小聖乃王家園裏土地勾便是。幾里叫做王家莊、…

(第八齣拜月)

小聖は王家園の中にあります。ここは王家莊と呼ばれており…

○まとめ

《海》で用いる“几首”は、それ以降に成った呉語文学作品には見られず、その類義語であると考えられる“幾里”が、《綴白裘》や《鉢中蓮》に見られる。

此の語は、当時の呉語地域の一小方言を反映しているには違いないが、それが何処かは特定できない。しかし、現代呉語の語彙分布を見る限り、[kE,kuE,gəʔ]という指示代詞を表わす系統のほかに、[tɕi(kI)]の系統を残す地域が存在することから、その系統の指示代詞が“几首”という語に連なる、と考えることができる。また、《鉢中蓮》にも見られることから、[tɕi,kI]のいずれの語音で読まれたかは明らかに出来ないが、明代呉語を引き継いだ語と言えよう。

注

- 1 人民文学出版本の巻末には、「方言簡釋」があり、“几首”を「那边。这边称“该首”」と解している。尚、小稿で用いた版本は、《海上花列傳》(1982年、人民文学出版)である。以下、本文に引いた用例は、特に明記しない限り、本版本に依っている。
- 2 《漢語方言詞匯》1964文字改革出版の名詞16方位の箇所には、「昆明」では“前首，后首，里首，外首，上首（上面），下首（下面）の方位詞や名詞の”城首（城里），村子首（乡下）を記載する。
- 3 『海上花列傳』(中国古典文学大系49) 平凡社の太田辰夫先生による「解説」参照 (535頁)
- 4 現代蘇州語の指示代詞には、次の3つがある。近指の[kE⁴¹]、遠指の[kuE⁴¹]それに中指或いは特指とされる[ga²³]である。
- 5 一つは蘇州語などに代表される一類で、指示部分の相違でもって、遠称と近称の意味区別をし、場所を示す接尾辞部分は共通するもの。

例：近称 哀搭，该搭，𠵼搭（这儿）

 /哀面，该面，𠵼面（这边）

遠称 弯搭，关搭，𠵼搭（那儿）

 /弯面，关面，𠵼面（那边）

蘇州の他に、宜兴，金坛，丹阳，靖江，江阴，常州，溧阳，无锡，常熟，霜墩，罗店，周浦，上海，松江，杭州，绍兴など

もう一つは盛江に代表される一類で、指示部分は共通するが、場所を示す接尾辞部分の相違によって、遠称と近称の区別を立てるもの。

例：近称 葛郎，葛口，葛搭，葛捞

 /葛郎，葛捞向

遠称 葛面，寄面，该面，还有面

 /葛面，寄面，该面

盛澤と同じ構語法をもつ小方言には、この他に、湖州，双林，宁波がある。また、それに類似したものが、黎里（吴江）に見られる。

双林 近称 葛搭, 葛塔
 /葛搭面
 遠称 葛头, 葛头搭, 葛头塔
 /葛头面
 黎里 近称 葛郎, 葛郎向, 葛搭
 /葛浪, 葛浪向
 遠称 加面
 /加面

6 亜東本の「校讀後記」によると、底本とされたものは、「小石印本」「鉛印本」と記すにとどめ、具体的な版本については触れていない。そのほか、《海上奇書》を参照したことが、記されている。

7 本注では、小稿の下文に述べる [kI] との関連で、必要に応じて併せて記した。

江阴	tɕij	己头 (这儿)
霜墩	tɕiI?	接面 (那边)
绍兴	kI?	□搭角 (这边)
	kI?	□里 (这儿)
	kI?	□头 (这儿)
盛泽	tɕij	寄面 (那边, 那儿)
	kI	该面 (那边, 那儿)
宁波	kI?	□点半边 (这边)
	kI?	□头 (这边)
	kI?	□点 (这儿)
	kI?	□面半边 (那边)
	kI?	□面 (那边, 那儿)

8 《当代吴语研究》の「字音对照表」によると、“该”字（見母蟹摂開口一等平声）は、盛泽方言では [kE⁶⁵¹] である。“那边, 那儿”を意味する [kI?] に当てた“该”字は、その音韻体系から見ると、例外字となる。

9 上掲の注7を参照

10 用例は、《重訂綴白裘新集合編》乾隆46年・集古堂刊（全12集）に依った。

尚、用例うしろの数字・略号は、集数・巻数を示し、「水」は水滸記、「荊」は荊釵記の略称である。

11 用例は、太田辰夫注《鉢中蓮》（呉語注稿）・呉語研究叢刊4・1972に依った。

参考文献

钱乃荣《当代吴语研究》1992上海教育出版

李小凡《苏州方言语法研究》1998北京大学出版

太田辰夫《中国語歴史文法》1981

[付記]

小稿の執筆にあたっては、横山永三先生（元山口大学教授）から、貴重な資料を恵投頂きました。又、石汝傑先生（蘇州大学教授）には資料面でお世話になりました。末尾ながら、ここに心よりの感謝の意を記します。